

「隣のレジの梅木さん」

倉光 泰子

登場人物

梅木響子（32）

昼間は高級食料品店、夜は恋人のラーメン屋で働くフリーター。ラーメン大好き。

小林広志（42）

響子の長年の恋人。家族でラーメン屋を営んでいる。響子曰く、日本一美味しいラーメンを作る男。

黒崎清子（52）

響子の同僚。夫から離婚を迫られている。

沢村美香（22）

響子の同僚。一流大学に通う美人大学生

桜木幸世（36）

響子の勤め先に買い物をしにくる港南病院の勤務医。

小林タエ（75）

広志の母親。足腰を痛め、身動きが不自由。

小林正志（41）

広志の弟。ラーメン屋を手伝っている。

黒崎貴子（21）

清子の大学生の娘。就職活動中。

梅木仁美（60）

響子の母。

男性客（80）

ラーメン永楽の常連。

薬剤師（28）

ナチュラルストアのそばの薬局の薬剤師。

キャリアウーマン（36）

清子の夫の不倫相手。

看護師（45）

港南病院勤務の女性看護師。

若い男（24）

美香と関係を持つ男。

店長（39）

ナチュラルストアの店長。

警備員A（50）

ナチュラルストアの入るビルの警備員。

警備員B（36）

ナチュラルストアの入るビルの警備員

○ ナチュラルストア・外観

都会の一角。

大きな道路に面した高層ビル。

その中に店舗を構える高級食料品店

『ナチュラルストア』。

○ 同・店内

ズラリと並ぶレジ。

サラリーマンやOL、金持ちそうな主婦たちで賑わっている。

白いブラウスにエプロン、頭に三角巾をした店員たちがレジを打っている。

その中で、ひとときわ手際よく仕事を

こなす黒崎清子（52）。

清子「4，222円のお返しでございます」
レジから自動的に出てくるおつり。

清子「ご確認お願致します」

客が釣りを財布に詰め込む。

清子は隣のレジに立つ梅木響子（32）の背中をチラッと見る。

丸みを帯びた身体にエプロンが食い込んで
んでいる。

何やら客に文句を言われているようだ。

そのそばで買い物カゴを片付ける沢村

美香（22）。

響子が必死に頭を下げる様子を横目で
見る。

響子「（声を震わせながら）申し訳ございま
せん」

ゆっくりと頭を上げ、客の表情を伺う
響子。

その目は潤み、額からは汗が流れ、顔
は真っ赤に染まっている。

○ タイトル『隣のレジの梅木さん』

○ ナチュラルストア・更衣室（夕）

清子と美香が私服に着替えている。

その後ろで椅子に座って、アイスを食
べている響子。

清子「さっきのお客さん、大丈夫だった？」

響子「ああ、あいつ……」

清子「何言われてたの？」

響子「レジ袋が有料だって言ったらキレて」

清子「そんな人もいるのね……」

響子「ま、有料にすんなって正直私も思っ

ますよ。だけど、私に当たんなって話で

しよ。私がこの体型だから強気に出てき

たんですよ、絶対」

清子「運が悪かっただけよ」

響子「いや、絶対この体型だからですよ」

美香「そう思うなら、これ、ダメでしょ」

美香は響子からアイスを取り上げる。

響子「食べないと、気持ち悪くなる」

響子はアイスを奪い返す。

清子「ちよつと我慢したら？」

美香「ほら、清子さんも言ってるし、食べる

のやめな」

響子は吐きそうになっている。

清子「……大丈夫？」

響子「最近胃がむかむかするんですよね」

清子「妊娠？」

美香「まさか！それはないよね、梅木さん」

梅木「うん。ないですよ、それは」

清子「生理は？」

響子「……最近来てないような気がするけど、

いつも不順だから気にすることないです」

清子「そうかしらね……妊娠かもよ」

美香「梅木さんがセックス？ないでしょ。絶

対にない」

清子「美香ちゃん、どういう意味？この私も

したことあるわよ。あなた、何歳？子ども

じみたこと言わないで頂戴」

美香「……」

響子「美香ちゃんだって父親と母親のセック

スでできてんだよ」

美香「……なんか美香も吐きたくなってき

た」

響子「もったいない！下から出るまで我慢。

私は絶対に吐かない。英語でネバースロー

アップ。これ私のモットー」

美香「ネバーギブアップとかじゃなく」

響子「ネバースローアップ」

美香「ちよつとかっこいいかも」

響子「テンキュヴェリーマツチ」

響子は立ち上がり制服を着替え始める。

清子「今夜も小林さんどこ？」

響子「そうですよ」

清子「今度食べに行かせてね」

響子「すぐ近くだし、食べに来てください。」

ラーメンは本当に美味しいんで」

そう言って笑顔を見せる響子。

○ 濁った運河（夕）

空からパンくずが落ちてくる。

それを目指して集まってくるカモたち。

○ 運河沿いの舗道（夕）

エサを奪い合うカモたちの様子を見ながらパンくずを投げ込む響子。

カモにエサを与えていた犯人だ。

○ ラーメン永楽・外観（夜）

ビルとビルの間にある小さくて汚い店。
響子の乗ったママチャリが止まる。
店に入って行く響子。

○ 同・店内（夜）

外観とは異なり、店内は清潔感がある。
カウンター席と、座敷席があり、壁に
貼られたメニューにはラーメン以外に
も天丼、生姜焼きなどが記されている。

響子「ごめんなさい。遅くなりました」
年老いた男性客が水を飲んでいる。

チラッと響子を見る男性客。

響子「こんばんは。あれ、誰もいない…？」

男性客「店長は猫と散歩。弟は出前」

響子「そうですか…（テーブルを見て）何か食べます？」

男性客「いや、いい」

男性客はそう言って新聞を読み始める。

奥から噓れた女の声が聞こえてくる。

女の声「広志？」

響子「（奥に向って）いえ、響子です」

女は響子を広志だと思っている。

女の声「広志！じいさんにあの女の作った角

煮でも出してやんな。味濃いけど、何もな

いよりはマシだろ」

響子「……」

声の主の女が店の奥から顔を出す。

背中が丸くなった広志の母、小林タエ

（75）だ。

響子に気づき目を丸くする。

タエ「……」

響子「……」

タエ「……ほら、突っ立ってないで出してや

んなさいよ。気が利かないね」

そう言って奥へ戻る。

響子は厨房の冷蔵庫から角煮を出し、

電子レンジに入れる。

男性客「いらんよ、塩っ辛いのは」

響子は壁を蹴りつけている。

そこへ帰ってくる小林広志（42）。

痩せた腕には目の潰れた黒猫を抱えている。

広志「じいさん、まだいたのかよー。（テ-

ブルを見て）えっ？注文してないの？」

猫を店の奥にやり厨房に入る広志。

男性客「腹減ってないのに何食べりゃいいんだよ」

広志がそつと響子の尻を触る。

広志「元気ないね、響子ちゃん。大丈夫？」

響子「（小声で）ちよつと止めて下さい」

広志の手を振り払う。

広志「つれないねえ……。なあ、じいさん、残りもんでいい？」

手を洗い冷蔵庫を覗く広志。

男性客「何だっぺいいさ」

広志「角煮どこ？」

レンジを指差す響子。

広志「これ、うまく出来てたよ」

響子「味が濃いから食べたくないって」

広志「俺はいい味だと思うよ」

響子「でも、止めて。また文句言われたくないもん。なんか作ってあげてよ」

広志「ダメだって。あの人はタダ飯するんだから、手間はかけない。それに、文句は言わせない。俺がいるんだから心配するな」

広志はレンジから角煮を取り出し、鍋に移す。

広志「さすがにレンチンはナシだろ。鍋で

温めたほうが美味しい」

男性客「言っとくけど、角煮はいらんよ」

広志「……」

響子は広志を睨み付ける。

○ 駅・改札（夜）

清子が改札から出てくる。

○ 高級住宅地（夜）

闊歩する清子。

○ 黒崎家・外観（夜）

大きくて洒落た家へ入って行く清子。

○ 同・居間（夜）

ソファで娘の貴子（21）と犬のコロ
が寝そべっている。

清子「ただいま」

貴子「おかえり」

清子「夕飯食べた？」

貴子「うん」

清子「就活は？」

貴子「普通」

清子「何、普通って……」

テレビをみながらクスクスと笑う貴子。

清子「あー、疲れた」

椅子に座る。

貴子「なら、辞めれば」

清子「それは、ダメ」

貴子「あいつらのために都内までパート行くとかバカバカしいよ」

清子「一度あの女に会ってみたいのよ」

貴子「直接対決？止めとけて。若くて美人でエリートでしょ。更に辛くなるよ」

清子「一度きちんと話したいのよ」

貴子「なんのため？無駄だよ。離婚して、お金もらって、そいじゃ、さいなら、で、いいじゃん」

清子「お母さんは誰からも誠意を見せてもらえないのよ！あいつらの思い通りにはさせない」

貴子「泥沼だね」

○ ラーメン永楽・外（夜）

店を閉めている響子と広志。

広志「疲れたね。今日はなんか、ごめん」

響子「……（広志を睨み付けて）許さねえ」

ママチャリに乗る響子。

広志「送ってくよ」

響子「別にいいって。今から、私、ラーメン
食べに行く」

広志「今からはさすがに体に良くないよ。だ
から送ってくって」

響子「しつこいな！いいって！」

広志「かわいい子が一人だと危ないだろ！頼
むよ。送らせてくれよ」

響子の表情が少し和らぐ。

○ オフィス街（夜）

昼間と違い、人がいない。

ママチャリを押す広志の横を歩く響子。

○ 響子のアパート・外観（夜）

古びた木造アパート。

階段を上る響子と広志。

○ 黒崎家・居間（夜）

清子がパソコンの画面をじっと見つめ

ている。

画面に出てくる30代の美しい女性弁
護士の記事。

その女の顔をじっと見つめる清子。

○ 響子のアパート・響子の部屋（夜）

整理整頓された部屋。

ピンク色のレースやぬいぐるみが並ん
でいる。

真ん中に敷かれた布団の中でセックス
している響子と広志。

広志「気持ちいいか？」

響子「もっと激しくう」
更に激しく体を動かす広志。

その動きを突然制止させ、響子は机の
上にあるパンに手を伸ばし食いつく。

広志「え？」

響子「ごめん、食べないと気持ち悪いの」

広志「なんだそりゃ。ありえないだろ」。

響子「ふー、落ちついた。……あ、一応聞く

けど続きする？」

首を振る広志。

響子「だよね」

二人の間に沈黙が流れる。

響子「……ねえ、広志さん、私、やっぱり

ラーメン作りたい」

広志「いいんじゃない。俺も腹減ってるし、作ってよ」

響子「違う、お店で作らせてって話し」

広志「無理だって。正志には言いにくいよ」

響子「広志さんほど上手くはないけど、あの弟よりは私のほうが絶対に美味しいの作れます。一度、食べてもらえますか？」

広志「別に良いけど、おふくろがな……」

響子はズボンを履き、ダンスからノートを取り出し広志に見せる。

ぎっしりと書かれた色んなラーメン屋の情報。

響子「どうだ、この研究の賜物。（広志を睨み付け）絶対にいつか自分のお店持ってや

る」

○ ナチュラルストア・店内（朝）

窓を拭く響子を見つめる美香。

美香「ねえ、絶対、痩せた方がいいって。顔整ってるのにもったいない」

響子「デブって病気なの、わからないの？」

美香「開き直らないで頑張ればいいのに」

響子「……」

美香「メタボになるよ、メタボリックに」

美香は響子の腹の肉を突然掴む。

美香「つてか、もう既にメタボか。梅木さんの病気、私わかったよ。頑張れないっていう病気でしょ」

響子「私が人生頑張っていないように見る？」

美香「アメリカでは肥満は怠け者とみなされるんだよ」

○ 運河沿いの舗道

カモにエサをやる響子。

カモたちが一斉に集まる。

目の前に落ちたエサを他のカモに奪われる弱虫なカモ。

響子「…：奪い返せよ」

○ ナチュラルストア・店内

清子「ありがとうございました」

客に深々と頭を下げる清子。

顔を上げると、パソコンで見た女らし

き人物が清子の目の前を通りかかる。

追いかけて顔を確認すると、別人。

○ 同・更衣室（夕）

響子がラーメン雑誌を真剣に見ている。

着替えながら本を覗く美香。

美香「食べ物のことばっか考えてんだね」

響子「ラーメンは1000円以内で一流のも

のを食べられる。そこがすごいよね。うち

のお店のは600円だよ」

美香「美味しいの？」

響子「すっごく美味しい。いつか食べにきてよ」

美香「……食べたいけど、美香、デブの素は食べない。それにさあ、そんなに美味しいなら人気店になるんじゃないの？」

響子「っていうか、いちいち私につっかかってこないですよ。朝からイライラするよ。ねえ、あなたにラーメンの何がわかるの？私がかうまいつて言ってんだからマジでうまいんだよっ！」

響子は部屋を出て行く。

○ オフィス街（夕）

猛スピードでママチャリをこぐ響子。

○ ラーメン永楽・店内（夜）

広志が厨房で麻婆豆腐を作っている。そこに入ってくる響子。

広志「あ、響子ちゃん。（響子の顔を見て）あれ？怒ってる？」

響子「日本一のラーメン、食べさせて」

ドタツと座敷席に腰を下ろす響子。

広志「え？今？」

響子「じゃなければ、自分で作ります」

広志「悪いけど、食材を無駄に出来ないよ。

それくらいうち厳しいんだ。ほら、麻婆豆

腐作ってるし我慢してくれよ。まずはおふ

くろの風呂、頼む」

響子「……師匠、私、弟子ですよ？」

広志「弟子は師匠のサポートもするもんだ

ろ」

舌打ちする響子。

○ 同・奥（夜）

タエがこたつで伊予柑を食べている。

体をすり寄せてくる黒猫を手で払う。

響子がそこにやってくる。

響子「そろそろお風呂に入りましょう」

タエ「……伊予柑食べてるんだよ」

響子「じゃ、お義母さんがお風呂入ってる間

に、私それ剥いておきますから、ね、入ってきてください」

タエ「は？おかあさん？私のこと言ってるの？嫁でもないのに凶々しい」

○ 同・風呂（夜）

タエの洋服を乱暴に脱がせている響子。
タエ「痛いよ、痛い。丁寧にしなさいよ」

○ 同・奥（夜）

タエの食べかけの伊予柑の皮を剥き、それらに何度も唾を吐きかける響子。
太めでハゲ気味の広志の弟、小林正志（41）がじっと見ている。

正志「おい、何やってんだ？」

響子「……あっ……え……水分を与えて

ジューシーに……」

眉間に皺を寄せ、響子を睨む正志。

○ナチュラルストア・店内（朝）

商品を陳列する響子、清子、美香。

美香「梅木さん、もう怒ってない？」

響子「恨んでるけど、怒ってないよ」

美香「良かった。それ聞いて安心！」

清子「二人って意外と仲良いわよね」

響子「いいや、仲良くないですよ」

美香「うちらスペックが違いすぎるもんね」

響子「一流大学行ってるからって調子づい

ちやつて」

清子「あの、ここの近くなの？」

美香「まあ、一応。留年中ですが」

清子「へえ、頭が良くて美人で、言うことな

しね。将来は何になりたいの？」

美香「外資系企業に勤めたいな」

清子「明るい未来ね」

美香「清子さんだって、旦那さんの稼ぎもい

いし、順風満帆な人生じゃないですか？」

清子「それがそうでもなくてね」

美香「同じです。多幸感、味わいたいな」

響子「二人とも私よりマシですよ」

美香「……そうかもね」

清子「そんなことないわよ、梅木さん。みんな同じように苦しいの」

響子「清子さん、本当にそう思ってます？」

響子は清子の目をジロっと見る。

清子「……」

○ 黒崎家・居間（夜）

パソコンを見ながらダンベルを持ち上げている清子。

貴子「ただいま」

貴子が帰ってくる。

清子「お帰り。バイトだったの？」

貴子「うん。……止めてよ、それ」

清子「あとちよっと」

貴子「……ねえ、面接落ちちゃったよ、第一希望の」

耳を貸さずに筋トレに励む清子。

貴子「ねえ、ちゃんと聞いてよ」

清子「あと5回」

貴子「やめてよ、本当に」

叫ぶ貴子。

清子は手を止める。

清子「これ（画面を指して）、これが愛人」

貴子「何回も見てるよ」

清子「あなたは何とも思わないわけ？」

貴子「思うさ、思うけど、止めてよ」

清子「悔しくないの？」

貴子「私がおかしくなりそうだよ」

部屋を出て行く貴子。

○ ナチュラルストア・店内

美香のレジに長身イケメン男性、桜木

幸世（36）が並んでいる。

桜木を目で追う響子。

○ 同・更衣室（夕）

カップラーメンを頬張る響子。

清子と美香が帰り支度をしている。

美香「ねえ、カッコいい人が来たの知ってます？ここら辺で働いてるならエリートかな？」

響子「お店で会うだけだよ？縁ないよ、美香ちゃん」

美香「そうかな。いつも美香の列に並ぶよ」

清子「じゃ、気があるかもしれないね」

美香「でしょ！」

響子「いいね、その楽観的などころ。顔がいからそういう感覚になれるのかな？」

ウインクをする美香。

響子「ちよつとドキつとした」

○ 響子のアパート・部屋（夜）

響子がテレビを見ている。

急に立ち上がり、トイレに行く。

○ 同・トイレ（夜）

和式のトイレにかがんでいる響子。

トイレが狭く、うまく身動きが取れな

い。

響子「せ、狭い」

○ ナチュラルストア・更衣室（夕）

帰ろうとする清子に話しかける響子。

響子「最近、吐き気がやばいんです。あ、も

ちろん吐いてはないですけどね」

清子「生理来た？」

響子「……いいえ」

清子「まだ検査してないの？今すぐやりなさ

いよ。隣の薬局で売ってるから」

響子「そんな勇氣ないですよ」

清子「そんなこと言っても仕方ないでしょ」

響子は首を振っている。

清子「命が関わってるのよ」

○ 薬局（夕）

清子が妊娠検査薬をレジに出す。

店員が清子の顔をまじまじと見る。

清子「私じゃダメかしら」

店員「（慌てて）いや、いえ、そんなことないです」

店員から商品を奪い取るようにして店を出て行く清子。

○ 運河沿いの舗道（夕）

ベンチに座る響子と清子。

響子が鞆からパンを取り出し、運河に

投げ込む。

カモが群がる。

清子「餌付け禁止だってよ」

響子「知ってます」

清子「ちゃんと小林さんに言うのよ」

頷く響子。

○ ラーメン永楽・店内（夜）

カウンターで響子がうつむいている。

響子「天井、食べたい」

広志「……天井を出すのは半年ぶりだよ」

響子「冗談だって。冷やし中華が食べたい」

冷蔵庫を開ける広志。

広志「夏期商品なので……材料ないです」

大きなため息をつく響子。

響子「……ねえ、妊娠した」

広志「……」

冷蔵庫としばらく向き合っている広志。

響子「そういうことだから。それじゃ、駅前

で冷やし中華食べてくるわ」

広志「……（ふと我に返り）お、おいつ！」

響子を追って顔を出す、既にいない。

○ オフィス街（夜）

暗闇をママチャリで走り抜ける響子。

○ 黒崎家・居間（夜）

ボクシングのDVDを見ながらリズム

カルにシャドウボクシングをしている

清子。

○ 駅前のラーメン屋・店内（夜）

冷やし中華を食べ終え、ノートを広げてメモをする響子。

響子「すみません、おすすめのラーメンも下
さい！」

携帯が鳴り響く。

着信画面には広志の名前。

大きなため息をつき再び注文をする響子。

響子「餃子も下さい」

○ 港南病院・外観

オフィス街の中にある総合病院。

○ 同・産婦人科・待合室

妊婦たちが待合室に座っている。

響子、辺りを見回し逃げ出そうとする。
その時、看護師（45）が響子を呼ぶ。

看護師「梅木さん、診察室へどうぞ」

響子「は、はいっ」

○ 同・同・診察室

医師「こんにちは」

響子「……こんにちは」

椅子に座る響子。

医師の顔を見るとスーパーで見かけた
イケメン、桜木だ。

響子「あっ！」

響子は驚きのあまり声を上げる。

桜木「……だ、大丈夫ですか？」

頷く響子。

桜木は響子をチラッと見つつ、問診票
に目をやる。

問診票には出産を希望しないに丸がつ
いている。

響子「私、妊娠してますか？」

桜木「はい。最後の生理が……この日だから、
（カレンダーを見ながら数える）ってこと
は9週目ですね」

響子「……そうですか」

桜木「出産を希望されていないようですが」

響子「……本当はそんなことしたくないです」

ギュッと手を握り締める響子。

響子「私、どうしたらいいんでしょうか？」

響子を見つめる桜木。

○ 清須美容整形外科・外観（夜）

美容整形外科から出てくるサングラスとマスク姿の美香。

○ ラーメン永楽・店内（夜）

店は既に閉められている。

座敷席でラーメンをすする響子と広志。

広志「戻ってきてくれてありがとう」

スープを飲み干し口元を袖で拭く響子。

響子「一応、修行中の身だからさ」

広志はほとんど手を付けていない。

広志「俺、もう腹一杯だよ」

広志は響子にラーメンを渡す。

響子「いいの？ やっぱり師匠の作るラーメン

は美味しいよ。日本一」

頷く広志。

広志「……なあ、結婚しようか」

食べる手を止め、広志を見つめる響子。

タエの声「広志、広志！」

響子から目をそらし階段を上っていく

広志。

○ ナチュラルストア・店内

カゴを片付けている美香の元へ桜木が
近寄ってくる。

桜木「すいません！梅木さんっています

よね？」

美香「（裏返り気味の声で）はい？」

桜木「ここで、働いてるよね、梅木さん」

美香「……まあ」

桜木「どこにいるかわからない？」

そばを通りかかった清子が呟く。

清子「運河かもしれないですよ」

桜木は走って店を出て行く。

○ 運河沿いの舗道

カモにエサをやっている響子。

桜木がかけよってくる。

響子「あっ！」

驚いてよろめく響子を支える桜木。

桜木「大丈夫ですか？」

響子「はい。……先生はどうしたんですか？」

桜木「梅木さんと少し話したくて」

響子「私と？」

桜木「いつもカモにエサあげてますよね」

響子「え？」

桜木「窓から見えるんですよ」

港南病院を指差す桜木。

響子「そうなんですか。これ、趣味なんです」

桜木「餌付け禁止なの知ってます？」

響子「……いえ、知りません」

餌付け禁止の看板を指さす桜木。

響子「あげたらいけない理由を私が理解でき

たら、餌付け、止めます」

桜木「（笑いながら）変な人ですね」

目を細めて響子を見つめる桜木。

響子「変な人ね、否めないけど。……っ
つか、先生、よくスーパーにいらっしやい
ますよね」

桜木「気づいてました？」

響子「ええ」

桜木「あそこでしか売ってないドライフルー
ツがあるんですよ。僅かな休憩中に走って
買いに」

響子「もしかして、いちじく？」

桜木「そう！良くわかったね」

響子「美味しいですよ」

桜木「でも、高すぎるよ。少ししかないのに
800円だよ？あり得ない。社割りとか
ないんですか？」

響子「……そのために話しかけに」

桜木はジッと響子を見つめる。

桜木「違います。何か手助けしたい……。梅

木さんは優しい人だから、いろいろ悩むんだと思います」

響子「いやいやいや優しくなんかないですよ」

桜木「カモに毎日エサをあげてる人が優しくないなんて考えられません」

響子「（冷笑して）優しいなんて、まさか。エサあげると、カモ同士でエサの奪い合い始めるでしょ。それ見るとカモの人生を操ってる感覚になるんですよね。それが、たまらないんです」

桜木「そうですか……」

響子「はい。私、心が真っ黒なんです。二人でカモの様子を見ている。」

○ ナチュラルストア・更衣室（夕）

響子はおにぎりをほおぼっている。

美香「ねえ、今日、美香のお気に入りのお客が梅木さん探しに来ただけ」

響子「ああ、桜木先生ね」

美香「何、先生なの？」

響子「うん、近くの病院の」

美香「まじで！ってか、なんで知り合いなの？」

響子「メタボだって美香ちゃんに言われて病院に行った」

美香「まじで」

爆笑する美香。

響子「相変わらず失礼だね」

美香「よく言われる。ねえ、ちよつと、この

後、時間ある？喫茶店行こーよ」

響子「何で？私のこと嫌いなくせに」

美香「いや、うちら、結構仲良いよ」

響子「仲良いか？」

美香「良いよ！ケーキ奢るから」

響子はおにぎりを口に詰め込み、鞆を持って立ち上がる。

響子「（口をモゴモゴさせながら）行くよ」

○ 喫茶店（夕）

ミルクセーキを飲む響子。

美香「で、やばいの、メタボ？」

響子「かなり」

美香「ダイエット手伝う？」

響子「大丈夫」

美香「美香ね、15キロ痩せたんだよ」

響子「すごいね」

美香「こうみえて努力、得意分野」

響子「へえ、どうやって痩せたの」

美香「指突っ込んで」

響子「私は食べた物を絶対に吐かない主

義！」

美香「あ、ネバースローアップだったね」

響子「世の中にはたくさん食べられない人が

いるんだよ、もったいないでしょ」

美香「自分のことが辛すぎて、他人を思いや

る余裕ない」

響子がじろじろと美香の顔を見ている。

美香「何？」

響子「なんか顔が違って見える」

美香「はあ？」

響子「キレイになってる」

美香「整形したよ、プロテーゼした」

響子「本当に？」

頷く美香。

響子「まじで？」

美香「鼻を高くしたの。それがどうした？」

響子「へえー、すごい」

美香「……ウソだよ」

響子「なんだあ、つまんないの」

美香「つっていうかさ、先生の名前何？連絡先

は？」

響子「結局それ？」

美香「うん、そうだよ」

美香はニコッと笑う。

○ ラーメン永楽・店内（夜）

カウンターを掃除している響子。

広志が作業服を着て帰ってくる。

響子「大丈夫？」

広志「夜勤はやばいな、疲れるよ」

財布から1万円を取り出し、響子に見せる。

広志「でも、俺だって、これくらいはね、出来るさ」

○ マンション・美香の部屋（夜）

洋服が床に散乱し、とても汚い。

美香が鏡で鼻を見ている。

鞆の中から美容整形外科のチラシを取り出し、電話する。

美香「もしもし、下手くそ！どうしてくれるんだよ。ブスになっただろ！」

怒鳴って電話を切る美香。

鼻息を荒くし、壁に何度も頭を打ち付ける。

○ ナチュラルストア・店内（朝）

響子と清子が窓を拭いている。

清子「ねえ、決めたの？」

響子「わかりません」

清子「いい加減に覚悟決めたら？」

響子「……だって」

清子「小林さんはどうなの？」

響子「私次第だと思います」

清子「じゃ、しっかりしなさい、梅木さん。」

お母さんには話したの？」

響子「無理ですよ。だって、三流大学の院まで出て就職しない私のこと、すごく怒ってるし。広志さんのこと、嫌いなんです」

清子「お母さんが何か支えてくれるかもよ」

清子は響子の手を握る。

○ 電車（夕）

電車で揺られている響子。

○ 梅木家・外（夜）

ドアベルに指を運ぶ響子。
なかなかベルを押せない。

○ オフィス街（夜）

清子と美香が歩いている。

美香の手首にはリストカットらしき跡。

清子「世の中辛いことばかりよね」

美香「……」

清子「でもね、自分より辛い人はもつといる。

それでも思わないと頑張れないわよね」

○ 梅木家・居間（夜）

響子の母親、梅木仁美（60）が

土下座する響子の顔を何度も叩く。

響子「ごめんなさい」

仁美「何であんたはバカなの。お父さんが死

んで、お母さん、どれだけ頑張ったか知っ

てるでしょ！何のために大学院まで行かせ

たのよ。わかってるの！？」

響子「ごめんなさい」

仁美「どうして、あんな男と。汚らわし

い！汚れ物！」

響子「ごめんなさい」

仁美は深呼吸し、手を止める。

仁美「……墮ろしなさい。あんな男の子どもなんて墮ろしなさい」

響子はお腹に手を当てて目をつむる。

響子「何でそんなこと言うの？」

響子は仁美の頬を何度も叩き返す。

響子「お母さんの自慢の娘にはなりたかった。今でもそう思うよ……」

仁美「……好きにしなさい。でも、今後ここには来ないで」

仁美から鼻血が出る。

それを拭こうとする響子。

仁美はその手を振り払う。

○ 黒崎家・居間（夜）

テーブルに置かれた紙を手にする清子。

紙には『家を出ます』と書かれている。

清子、床に座り込む。

○ 電車・車内（夜）

人目も気にせず涙を流す響子。
マスカラが落ち、目の周りが真っ黒。

○ 響子のアパート・外（夜）

部屋の前で広志が座り込んでいる。
それに気がつき、階段を急いで上る響子。

広志「（響子に気づき）走っちゃダメだよ。
危ない」

○ 同・響子の部屋（夜）

キスをしながら部屋に入ってくる響子
と広志。

電気をつけ、じっと見つめ合う。

響子「私には広志さんしかいない」

広志「結婚しよう」

響子「うん」

お互いの唇を噛みちぎるような激しい
キスをする。

○ ナチュラリストア・外（朝）

鼻歌を歌いながら窓を拭いている響子。

清子が同じ窓をずっと拭き続けている。

響子「そこ、もうキレイですよ」

清子「ああ、ブーツとしちゃった」

響子「大丈夫ですか？」

清子「うん、大丈夫よ」

響子「……覚悟決まっただんです」

清子「そう」

響子「愛があれば乗り越えられる気がしました。私、幸せかも」

清子「……なんでだろう。人の幸せな話って耳障りよね」

響子「……清子さん？」

○ 同・店内

響子のレジにスーツをビシッと着こなした美人キャリアウーマン（36）が並ぶ。

響子「いらっしやいませ」

響子、商品をレジにかざす。

響子「450円が一点、168円が一点…」

手に持ったビンを落とす響子。

響子「少々、お待ちください。取り替えてきますので」

キャリアウーマン「急いであるから、そのまま結構ですよ」

響子に微笑むキャリアウーマン。

響子「いえ、すぐ持って来ますから」

キャリアウーマン「あつ、ありがとうございます
ます」

買い物カゴを片付けている清子の目に入ってくるキャリアウーマンの姿。

インターネットの女だ。

一心不乱にキャリアウーマンに殴り掛かる清子。

キャリアウーマン「きゃっ！何？」

清子「あんたが幸せそうだから」

パンチパンチ。

清子「あんたがむかつくから」

パンチパンチ。

清子「家庭が崩壊したから」

キックキック。

清子「そして自分に」

と言って、自分の顔にパンチパンチパンチパンチ。

清子は床に倒れる。

キャリアウーマンは鼻を押さえ、清子の顔を見る。

清子「この名札が目に入らぬか」

名札を見せつける清子。

そこには『黒崎』の文字。

キャリアウーマンはハツとした表情になる。

清子「一度くらい謝ってくれば良かったのに……一度くらい……」

清子は警備員に連れられて行く。

キャリアウーマンは居所が悪そうに店内を出て行く。

清子「卑怯者！」

清子の声が店内に響く。

響子「清子さん……」

清子「梅木さん、おめでとう」

清子は響子に手を振っている。

清子「達者でな！」

○ 運河沿いの舗道（夕）

響子がカモたちを見ている。

○ ラーメン永楽・小林家居間（夜）

タエと正志に食事を用意する響子。

タエ「後でそこも掃除してくれるかい？」

響子「もう、しましたけど」

タエ「そうかい」

床のホコリを確かめるタエ。

正志「結婚すんだろ、梅木さん」

響子「……はい」

正志「なら、もっとおふくろの言うこと聞いてやれよ」

タエ「いいんだよ、正志」

正志「よくねえだろ、何にもしないから、こんな肥えてるんだよ」

響子「そこまで言わなくても……」

正志「兄貴もバカだよ、猫もそうだけど、変な奴に愛情注いでさ。……ねえ、この微妙な料理何？」

響子「ゴーヤチャンプルですけど、何か？」

正志「苦いよ、毒入れた？」

響子はギュッと拳を握りしめる。

○ ナチュラルストア・店内

クスクスと笑っている美香の視線の先には響子。

袋を広げようとするが、なかなか広げられない響子。

美香「不器用だよね……」

○ 同・更衣室（夕）

響子がエプロンを脱いでいる。

美香が脇で響子のお腹周りをじっと見

ている。

美香「マシヨマロみたい、梅木さん」

響子「……殺すよ」

響子、小声でつぶやく。

美香「……まじギレ？」

響子「あ、聞こえた？」

美香「うん。……ねえ、観察して良い？」

響子「何を？」

美香「梅木さんを。……格差社会のレポート」

ト書きたいんだよ」

響子「はい？」

美香「梅木さん、結構底辺じゃん」

○ 運河沿いの舗道（夕）

カモにエサをあげている響子。

隣にはなぜか美香。

響子「ついてこないでくれますか？」

美香「だって、レポート、ヤバいんだもん。

また留年しちゃうもん」

ママチャリに股がる響子。

その後ろに座る美香。

美香「どうぞ、出発」

響子「二人乗り、ダメですけど」

美香「わかった、走ってついてく」

ママチャリをこぐ響子を追う美香。

○ ラーメン永楽・前（夜）

ママチャリを店の前に置く響子。

そばには美香がいる。

響子「来ないですよ」

美香「だってラーメン美味しいんですよ。証

明してよ」

○ 同・店内（夜）

響子と美香が入ってくる。

座敷席で寝ている正志が飛び起きる。

響子「（小声で）おはようございます」

美香「お座敷？（メニューを見て）ウナギ？

天井？」

正志「……なんだ梅木さんかよ」

響子の後ろには美香がピッタリとくっ
ついている。

正志「（美香に気づき）……いらっしやい」

響子「広志さんは？」

正志「日雇いに行ってるよ」

響子「……」

正志「梅木さんが妊娠したせいで、兄貴は2

4時間働きっぱなしだよ」

美香「妊娠？」

正志「（美香に向かって）こんな体型でもお

さかんなんですよ。お金もないのに子ども

作るなんて本当に迷惑な話だよな」

響子は厨房の陰に隠れる。

鼻をすする音。

響子の顔を覗く美香。

美香「梅木さん、泣いてんの？」

二人を横目に奥へ行く正志。

その後を追う美香。

○ 同・小林家居間（夜）

美香が居間に上がり込む。

正志とタエが目を丸くしている。

美香「ちよつと、梅木さんに謝れよ」

正志「……俺が何か言ったか？」

美香「セクハラ発言してただろ。謝れよ」

タエ「まったく人のうちに勝手に上がってくる

なんて無礼だね。正志、誰だよ、この人」

正志「梅木さんが連れてきた」

タエ「だから下品なんだ。マナーつての知ら

ないの、あんた？」

美香「ババア、今、何だった？」

正志「おふくろに変な口は聞くなよ」

美香「うるせえよ。私のこと下品って言った

よな？よくぞあんたたちが言えたもんだよ。

あんたの息子は人イジメてんだよ、この年

になって」

正志「わかったわかった。謝れば、いいんだ

ろ」

タエ「正志。謝るな」

美香「ババアは黙れ。ハゲは謝れ」

○ 同・店内（夜）

目をまっ赤にして、チャーシューを食べている響子。

正志が響子に向かって謝る。

正志「悪かった。申し訳ない」

食べている手を止める響子。

美香「帰ろう」

美香は響子の腕をつかみ出て行く。

○ 住宅街（夜）

美香がママチャリを転がしながら歩いている。

その後ろを歩く響子。

○ 響子のアパート・前（夜）

響子が美香に頭を下げる。

美香「なんであんなとこにわざわざ行くの？」

響子「広志さんのラーメンが好きだから」

美香「……広志さんがどんな人か知らないけど、よく考えるべきだと思うよ」

響子「……うん」

美香「美香も随ろしたことがあるから、何でも相談乗るよ、真面目に。……（外観を見回して）それにしても、家、古いね」

○ マンション・美香の部屋（夜）

パジャマ姿の美香、日記帳を広げる。

『梅木さんを観察、今日もリスカはナシ』と書いて、ベッドに飛び乗る。

○ 響子のアパート・響子の部屋（夜）

鯖缶にマヨネーズとネギをかけて食べている響子。

彼女に土下座している広志。

広志「本当に悪い。辛抱してくれよ」

響子は遠くを見ている。

○ ラーメン永楽・風呂場（響子の妄想）

タエと正志の死体をバラバラにしている響子。

肉を削いで骨を持ち広志に渡す響子。

響子「右が鶏ガラ、左が豚骨」

広志「いいダシがとれるな」

広志は笑っている。

○ 響子のアパート・響子の部屋（夜）

響子が広志を見る。

響子「ねえ、家族を捨てて」

広志「……は？」

響子「私は捨てた」

広志「……無理だよ」

響子「はい、私たちは終わりです」

響子はボクシングのゴングを鳴らすように缶を箸でたたく。

○ 港南病院・産婦人科・診察室

響子と桜木が向き合っている。

桜木「こんにちは」

響子「こんにちは」

桜木「どうですか？決まりました？」

響子「はい、決まりました。随ろします」

桜木「……そうですか」

響子「はい」

○ 運河沿いの舗道

カモにエサをやっている響子。

運河に水滴が垂れる。

響子の涙だ。

○ 港南病院・産婦人科・診察室

窓の外を眺める桜木。

響子の姿が見える。

看護師「先生、患者さんです」

桜木「あ、すみません」

○ ラーメン永楽・外（夕）

ママチャリに乗った響子が店内を覗く。

中にいる正志と目が合う。

正志が外に出てくる。

正志「早く手伝えよ。おふくろのメシ作れよ、早く」

響子は逃げ出す。

響子「やっぱ、無理だ」

○ 駐車場・車の中（夜）

美香が若い男（24）の股間に顔を埋めて、上下している。

男「あっ、い、イク」

美香の頭を押さえる男。

男「いやー、お見事。ありがとう。うまいね、ほんと」

美香「そうかな。飲み物ある？」

ペットボトルを渡す男。

美香「…：ねえ」

男をじっと見つめる美香。

美香「私のことどう思ってるの？」

男「可愛いよ。すげー可愛い」

美香「好きかどうか聞いてんの？」

男「ちよと、何、真面目になっちゃってん

の？スローダウンスローダウン。頼むよ。

よし、駅まで送ってくねー」

美香「いや、ここでいいや」

男「じゃ、またいつか頼むね」

車を降り、男が去って行くと泣き崩れる美香。

○ 響子のアパート・響子の部屋（夜）

永楽ラーメンの作り方、と書かれた分

厚いノートを見ている響子。

ドアを叩く音。

ドアのそばに行き、穴を覗く。

そこには広志。

響子「帰って」

広志の声「……これ」

ポストに封筒が落ちる。

響子「（中を覗いて）何のお金」

5万円が入っている。

ドアを開け、広志に封筒を返す響子。

広志「何かの足しに、と思って」

響子「これじゃ、何するにしても足りませ
ん」

広志「わかった、仕事増やすよ」

響子「勝手にどうぞ」

響子はドアを閉める。

○ 響子のアパート前の道（夜）

広志が出前用の原付にうなだれている。

○ 響子のアパート・響子の部屋（夜）

窓から広志の姿を見ている響子。

お腹に手を当てる。

冷蔵庫から食材を取り出す。

× × ×
長ネギ、ショウガ、ニンニクを切る響
子。

× × ×
魚のアラ、鶏ガラ、豚骨を大きな鍋に

入れる響子。

×

×

×

麺をゆで、スープに入れ、具材を盛りつける響子。

シンプルな醤油ラーメンが出来上がる。ラーメンを机の上に置き、眺める。

響子「いただきます」

スープをすする。

響子「（お腹に語りかけるように）美味しい。パパの味、美味しいね」

○ ナチュラルストア・店内

レジに立つ響子。

目の前には桜木。

響子「あ、先生」

桜木「久しぶり、調子はどうですか？」

響子「元気です、ありがとうございます」

桜木「休み時間、あるの？」

響子「あ、あと5分くらいで」

桜木「カモにエサあげる予定？」

響子「まあ、はい」

桜木「じゃ、運河で待ってます。それじゃ」

○ 運河沿いの舗道

桜木の座るベンチに向う響子。

響子「すみません」

桜木「いや、こちらこそ急にすみませんね」

響子「なんででしょうか？」

桜木「今度、どっかに行きませんか？」

響子「はい？」

桜木「息抜きになるかなって」

響子「……」

桜木「やっぱ無理か……」

響子「……先生、何が目的ですか？」

桜木「何か役に立ちたいから」

響子「私が哀れだからですか？」

桜木「好きになるのに理由が必要ですか？僕

なら梅木さんを救える気がします」

名刺を差し出す桜木。

桜木「僕、さくらぎこうせいっていいいます。」

連絡、待ってます」

響子「……すごい嬉しいです。でも、私、人に救われる人生よりも、自分自身で自分を救ってみたいです。だから連絡できないかもしれません」

桜木「そっか」

響子「来世でまた会いたいですね」

桜木「きつと見つけてみせます。それじゃ」

響子「ねえ、私のどこが良いんですか？」

桜木「見た目がドストライクです！」

桜木は颯爽と走っていく。

○ ナチュラルストア・更衣室（夕）

美香がボーっとしている。

鼻歌を歌いながら響子が着替えている。

美香「……死にたい」

響子「えっ？どうしたの？」

美香「梅木さんが機嫌いいからむかつく」

響子「いや、毎日辛いですけど」

美香「じゃ、何でそこから抜け出そうとしな

いの？」

響子「してるつもりなんだけどね……」

美香「努力が足りないんじゃない？」

響子「そうかもね。これからは頑張るよ」

響子は再び鼻歌を歌い始める。

美香「何歌ってるの？」

響子「えっ?? 私歌ってた？」

美香「うん、すごく嬉しそうにね。良いこと

でもあった？」

響子「ないわけでもないけど……」

美香「教えてよ」

響子「いや、大したことないからな……」

美香「じゃ、いいや」

響子「……聞きたい？」

美香「ほらやっぱ聞いて欲しいんじゃないん？」

響子「……桜木先生からどっかに行こうつ

て」

美香「はあ？」

響子「奇跡でしょ？」

美香「何それ……」

美香の顔が真っ青になる。

美香「ちよつと、死んでくる」

美香、走って出て行く。

響子「ちよつと、待ってよ、美香ちゃん！続き、聞いてよ」

響子、立ち上がるろうとするが、立ち上がれない。

響子「うあ、やばい」

吐きそうになっている響子。

響子「ネバースローアップ」

そう言いつつ、そばにあるゴミ箱に嘔吐する。

響子「……はあ……すごいっ！スッキリした！」

○ 同・外（夕）

道端に人だかりが出来ている。

店長に声をかける響子。

響子「……あれ？」

店長「美香ちゃんが飛び出してはねられた」

呆然と立ちすくむ響子。

救急車に運ばれて行く美香が響子の目の前を通り過ぎる。

響子「美香ちゃん！」

響子に手を振る美香。

美香「イケメンの医者、捕まえてくるね」

明るく笑ってみせる美香。

○ 運河沿いの舗道（夕）

カモのいない運河を見つめる響子。

○ オフィス街（夜）

人をよけながら、ママチャリをこぐ響子。

○ ラーメン永楽・外（夜）

響子が店の引き戸を勢いよく開ける。

○ 同・店内（夜）

息を切らした響子が入ってくる。

目を丸くして響子を見る広志。

洗い物をする広志の手が止まる。

響子「（息を切らしながら）広志さん、私と覚悟を決めて。絶対に私が支えてみせるから、一緒にここから出よう」

広志「…：何？」

響子「どうする？私と（お腹を指差して）この子と新しい人生始めよう。無理？どうなの？」

広志「ちよつと待てよ」

響子「5、4、3、2、1…：」

響子はゆっくりと店を出て行く。

広志「きょうこー！俺も行く」

響子は振り向いて満面の笑みを浮かべる。

終わり